

派遣経験を教育現場や地域にどういかすのか

生田佳澄

(平成 14 年度 1 次隊 小学校教諭 ホンジュラス)

みなさんこんにちは。発表を始めさせていただきたいと思います。今までの先生方が平成 20 年度の先生と言う事で体験もすごく色鮮やかで楽しい体験がたくさんだったと思うのですが、私は帰国してから 6 年目になるので大分色あせてしまったところもあると思うのですが、帰国後にどういう事をしているのかという事を中心に今回お伝えさせていただきたいと思います。

先生方黄色い資料を、お持ちでしょうか。この資料の関連したところとしては 160 ページ、(個人情報保護のため) 写真がぼやけてほとんど見えないこのページなのですが、そこから辺を参考にご覧いただきながら進めていきたいと思っています。

私としては、何をしてきたかという事よりも、何をこれからして行くのかという事を常に日々考えながら実践しています。派遣させていただいたことは、とても貴重な経験になっていますので、それをどのように還元していくのか、学校の教員として、教育現場として、地域に生きるものとして、それぞれの関係の機関と連携しながらそれぞれを結び付けつなげて、それが子どもの今というものにどのように関わっていくのかというその視線でとらえています。私自身はホンジュラスで小学校教員としてこのような活動をしてきました。

また、協力隊活動の中では、算数のプロジェクトと言う事を 1 年目は主に、2 年目は首都の小学校なのですが、算数の研修に関わる一方、ほぼ半日間学校のすべての学年のすべてのいろんな教科に関わる場所も見させていただきました。現地の教育を知る大きなきっかけになりました。

当時、日本の大使館の方が提携して長岡市が舞台になった「米百俵」という劇がありまして、それをちょうど開催するという時でした。たまたまホンジュラスに 200 人ぐらいいる日本人の中で、(私が) 琴が演奏できるということがあったのでそこで日本大使館(竹元大使からの依頼を受ける形で) Honduras 文化庁主催の教育の重要性を伝える事業に関わらせていただきました。国立演劇学校学校の教師や学生が演じる関係で、日本の所作を伝えたり、琴の演奏を Honduras 人学生に伝えたり等、そこ(国立演劇学校)との関連性を持ちながら活動を進めていきました。日本文化を知っているという事は大きな強みなんだという事、改めて日本文化を知るきっかけ、広めていかななくてはいけないなという事を知るきっかけにもなりました。

国内にたった二畳しかない仮設用の畳を使いながら間(はざま)組という企業が Honduras に入っていたのですが、そこが無償で劇「米百俵」の大舞台を作ってくれました。

その間組との関連の中で協力をいただき効果のあった例についてお話しします。

当時活動していた小学校（ラス・アメリカス校）でカウンターパートナーがいたのですが、そのパートナーが子どもたちに示すための大きな三角定規を集めの画用紙で作っていたんです。毎回使うごとにペラペラはがれてきてしまうし、何かいい方法ないかななんて、なんとかしたいんだっていつてきました。その気持ちを受ける形で、「それならば」ってことで、「日本では、例えばこんなものを使ってるよ。」と、いうものを示しました。その実物については、その時機を見計らいながら、サポートをしてくれる学校の方にも連絡を入れて、もう廃棄する処分するという学校で皆さんご存知のような「算数ぼっくす」のような教具も、とにかく全部送ってもらってました。それを元にこの間組の方とも話をして、現地にある材料で現地の学校で必要数という事で、13 から 15 なんですけど、大きな三角定規と分度器もそこで制作してもらってそれを活用したという経緯がありました。

活動して行く中で心掛けたのは、こういういいものがあるからどうぞという事ではなくて、現地の方々がこういう事で困って、何かいいアイデアないかと求められていたときに、たくさんあるアイデアの中の一つとして私たち日本の小学校ではこんなようなやり方をしていただけかどうかという、そのアイデアの出し合いってというような形でニーズにこたえるっていう形でやっていました。

1年目は、首都から大分離れたところなんですけど、その国境近い所でやっていたときの例もお話しします。

現地の学校で立体の模型を紙で作っていたのですが正確に示すことができないという事がありました。現地のニーズにこたえる形で、例えばという事で、日本では木などを使った立体模型があるんだよ、例えばこういうようなものだよというような提示をしました。だったら近くの大工さんと一緒にこういうのだったら作れるよと、現地の教師がアイデアを出し、(プロメタムの授業で紹介しあう場を設けたり、現地の教師と一緒に自主講習を開き一般の先生方にも情報を受けていただいたりしました。そういう形で一回ぼっきりで終わるのではなく何回も何年も使えるものを（現地の方のアイデアと融合させながら）考えたというものもありました。

派遣中に行った交流活動という事でこのようなものを挙げましたが、日本の新聞に掲載させていただいた記事というものもとても大きな反響がありまして、全国単位での支援を得られたという事、財政機構だけではなくサポーターとの連携が取れたというのがとても大きな力になりました。

派遣に際して必要だったものというのはサポート体制、マンパワーではなく自分を通しての多くのサポーターがどれだけいるかという事が、どれだけ活動の幅を広げるのかというところに関わるものなのかなと感じました。

日本の現職教員でなければ得られないものというのを今のうちから用意しておく事も大事かなと。今の段階だとまだあいまいだと思いがちな日本の学校での日常風景とか、子ども

もの描く絵とかそのようなものについてはデータ化して持っておくと、向こうの先生たちが必要とする時にそういう質問に答えてあげられる何かになるかもしれないと思いました。

また日本人の描く絵とそれぞれの国の子どもたちが描いた絵は、それぞれの国の先生たちにとってとても新鮮なものに映るケースもあるらしいので、そういうものも大事にしつつ、また日本の子どもたちにとって直に交流する機会になるのでそういうものも一つの手段かなと思います。

帰国後に生きる派遣経験という事でまず人脈という事を挙げていきたいと思います。たくさんいらっしゃるのですが例えば育てる会の菊池先生は、自分が帰国後の活動の中で人脈的に困っているケースに対して糸口を与えてくれたり、その次の還元活動につながる（兵庫教員 OV 会 丸山先生）を紹介してもらったりとか、また筑波大の磯田先生のところに関しては算数教育という事で、帰国後の算数教育との関連性というところではとても大きな力を受ける事が出来ました。また佐藤先生、冊子にあるように自分達が活動した事を振り返りや自分の活動以外でも、他の先生方のアプローチの仕方や専門家の方を知る機会になったなと思います。

あとはここで書いてあるように 0 から作り出す能力というのが派遣で得たものではないかと思っています。例えば 10 番目にあるような支援の体制作りというのも派遣から得た大きなものだと思うのですが、例えば外国人派遣教員というのがいるところであれば、外国籍の児童の学習指導なり適応指導がうまくいくだろうと考えがちなんですけど、なかなか予算的なものとか設備面の事とかいろいろ含めるとそういう体制ができる学校ばかりではないと思います。もしそういう学校があったとしても、予算の関係上打ち切られるケースもあると思うんですが、それならばないならなりのやり方、または理解者を増やす方法などその中でやり方があるだろうと、その中で時期を見ていく事、時期を見ていく中でその学校の体制を、ちょっと見方を変えることでまた作り上げていくことができるんじゃないかと。

そういうものもここ 6 年たってようやくというところもあるんですけど反映することができるようになってきました。例えば朝読書の時間を使いながら、その時間外国籍の子で日本語の指導が必要だという子たちの朝の勉強の時間と言うのを同じ階の近くのところで開催するなど。もちろん、学校長はじめ、関連の教師と話し合い生まれた本校独自の体制ですが、そういう事も方法の一つかと感じています。

教育現場として 1 年目でした事と 2~4 年目にした事、それぞれ可能性もあれば、限界もあります。1 年目でできた事はほんのわずかでした。その中でも私はたまたま派遣前にいた学校に戻る事が出来たので、そこでのつながりという事もすごくラッキーだったと思っています。

また市内でも国際理解の担当というのがおありまして、また外国籍の指導もやってきた経緯があるので、学校内だけでなく市という単位での還元活動の機会を得られるケース（現

職教員派遣 帰国報告講演会等) もありました。

また 1 年目で米百俵の関連で、長岡市にも行く機会がありました。ちょうど中越地震があった直後だったのでチャリティーコンサートもしました。(長岡市役所、市民課と連携) 一番被災が激しかった学校の、総合学習の一環として、ホンジュラス人が文科省の関係で来日していたので、その人たちやアフリカで活動していたメンバーの旦那さんがアフリカの方だったので、その方たちの踊りとかを合わせた形で展開しました。また静岡県沼津市で邦楽祭がありました。そこでも米百俵の主演ホンジュラス人 (Jose Luis Recinos 氏) と合同でオペレッタ風の演奏をしました。

やろうと思えばいろんなところに機会はあると思うので、それを自分が選択するか、過ぎてしまうかという事もあるのかもしれないので、いろんなところにアンテナを張りながら機会を見つけながら活動して行くことが必要なのかなと実感しました。2~4 年目についてはこのような形です。

学校の中でできる事というのは、6 年目にして感じるのは、いろんなところいろんな教育活動全般に対して、多学年に対して還元する事が可能だなと感じています。(写真提示) これは 2~4 年目なんですけど、6 年目の今になって、学校のホームページも活用しながら発信する事も出来るなと感じています。

これは帰国後 3 年目ぐらいの話なのですが、外国籍児童に対して、(当時勤務校は、ペルーの子どもたちが多い学校でした。) 4 月、実施した授業の様子です。

ペルーで外国人児童として過ごした日本人青年を招き、外国人児童に向けたペルーを学ぶ授業を実施しました。自分がペルーで外国籍として過ごした学校生活と、こちらに帰ってきてのふるさと学習も含めてのメッセージを伝えていました。写真右側の方の真ん中にいる女性の先生が当時の学校長でした。

在籍クラスで子どもに紹介する事も担任の先生方との連携の中で可能だし、また在籍クラスの子が国際クラスに来て学ぶことも教科によっては可能な事です。

また静岡大学の方で学生ボランティアの活動があるのですが、矢崎先生という方が中心になってやっているんですけど、そことの関連も持たせてという事も可能でした。

色々なところでの連携や人脈をつなげていくと、子ども達への教育効果もさらに上げられるかなと感じました。

帰国後 6~7 年目を見ていくと、だいたい還元活動が増えていると思います。

特別支援教育というのは一見関係ないように感じるかもしれないんですけど、外国籍の人の特別支援教育も入っている現状があったり、特別支援教育でのアプローチの仕方、そ

れとの関連づけることもできたり、また家庭科、言語、読解の授業というところもとても大きいとお思います。

5 番目に書かせていただいたのは算数の教材開発ということです。APEBEMO と言うのは、ペルー人でいろんな医者が文科省の奨学金を受ける形で日本の研究機関で研修を受けた人たちが作っている OB 会なのですが、その方たちと一緒にペルーに行った折に授業参観したり、文化紹介したり、そういう活動をしたなかでペルーの公立の小学校の教員たちと「TANOSHIKAI」という算数のプロジェクトをたちあげました。一昨年度までは、研究生として一人、昨年度、JICA の事業でたまたま「南米算数」で TANOSHIKAI のペルーメンバーの一人もお目見えしたのですが、そういうものを作り、算数を中心にした活動をしている状況もあります。

翻訳物について、先生方もこれから色々な言語をやられると思いますが帰った時にどういう風にといった時に、例えば私たちの学校のように翻訳文書を作って、その学校だけで使うのではなくてデータを市の教育委員会の管轄の中に入れて、必要な学校が取り出せる状況を作るといふ事もできると思います。

地域の活動としては、外国人の活動支援が必要です。それで学習支援を今日もやりました。外国籍の学校の図書もペルーに行った折に買ってきて図書館に寄贈して、寄贈するだけではなくてワークショップを開いています。

地域の祭りに参加する中で、地域の人たちもいろんな人たちがいる、いろんな文化があるという理解から子の理解につながり親の理解につながるという経緯がありました。地域防災課というところからも話があって、地震を知ろうということで翻訳物の作成にかかわっていたり FM のラジオの教育番組をやったりしました。

医療関係について、医療スタッフが言葉の関係でなかなかいない状況があつてとても大変だというのがありました。

活動の中で必要とするものについては例えばペルーの子ども達の教科書どうなっているのかなと言う事で、銀行なんですけど企業経営研究所というのがあって、そこで海外研修の募集があつたので、そこでこんな事をやってみたいという事をいってペルーの教育省の方にもつないでもらいながら会議を行って始め、1冊だけもらえてたんですが教育面の方も理解を示してくれて全国で全教科もらってきました。それをもとに問題集を作って、2回目に行った時に開いたりしていました。日本の教科書を使った翻訳を作ってみたり、自作の問題集を作ったり、それを貼ったりするなどの作業でお母さん達が手伝ってくれました。

ペルーに行った時に自発的にした活動や、依頼を受けてした活動も、JICA でやってきたからこそできる事なのだろうと、感じています。

例えばセミナーの開催にしても、公開授業にしても、ワークショップにしてもやり方については派遣の時に学んできた方法が一番のベースになってます。また、食べてきたものも学校の家庭科の授業で使えたり、防災教育も向こう（ペルー）でもやる事が出来たり、中国との交流も、今年は難しい面があったのですが、市役所市民協働課や、国際交流協会（Nice：岳陽部会）との連携を受けて実施できた例などもありました。

今年だからこそできた事は、小中連携事業です。（写真提示）この子たちは中学生です。中に小学生がいます。小中で一緒に国際集会を開催しました。

ただ見るだけではなくて自分達ができることは何というところから始まりました。

例えば日本の文化を紹介したいんだということで、しゃぎりをやる子たちもいたり、剣道をやったり、ヒップホップをやったり、ラテンダンスをやったりしました。

日本人とラテン子たちと一緒におどって、最後に挨拶をラテン式にしていました。ほっぺのあたりにチュッとやるのですけど、その中で、子どもたちは、いろんな国を知るきっかけになりました。南米の生活に触れてそれぞれの違いに意識しました。

教科指導の中では、家庭科では、いろんな還元活動との関連があると感じました。

それらの事を含めて、国際理解教育では、人理解を通して、「優しい。」「仲良しになった。」「インドネシアを近くに感じるようになった。」と、子どもたちの意識の変化が生まれたものもあります。

学校のホームページもありますが、還元活動を通して子ども達のかげがえのない笑顔を大切にしていきたいと感じています。

「今沢小学校」と検索していただければ、そこに本校のホームページがあります。

先生方の学校にホームページもあると思うんですが、その中に「国際」というフォルダを作っておいて、国際理解教育として各学校でこういう事を行っているという発信というのも、派遣経験のある先生方だからこそできる事じゃないかと思うので、それらの活動も必要だと感じています。